



Title	繰り返し表現における発話者の態度：「意外感」による「否定的態度」を中心に
Author(s)	カンジャマーポンクン, サティダー
Citation	間谷論集. 2019, 13, p. 195-212
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

繰り返しの表現における発話者の態度 ——「意外感」による「否定的態度」を中心に——

カンジャマーボンクン サティダー

〈キーワード〉 繰り返しの表現 感情の表出 発話者の態度 否定的態度 意外感

1. はじめに

「繰り返しの表現」という行為は我々の日常生活の中で、よく見られる。言語学の面でも「繰り返しの表現 (Repetition)¹」という言語表現があり、「繰り返しの表現」とは、書きことばにおいても話しことばにおいても、ある文脈に既に現れた語や文などを何度か再現することである (中田 1992: 269)。繰り返しの表現の機能については従来研究されてきたが、それらは主に小説や詩、あるいはことば遊びなどというような一方的コミュニケーションについてであり (牧野 1980)、双方向的コミュニケーションあるいは会話レベルにおける研究はまだ豊富とは言えない。また、従来の言語行為の「繰り返しの表現」は単に同じことを繰り返す、何の意味もなく、文の冗長性を上げるに過ぎないものであり、非創造的なものであるため、避けられるべきものとして否定的に見なされてきた (牧野 1980)。しかし、以下の (1) のような場合は単に文の冗長性を高めるに過ぎないものであるだろうか。

(1) ブルース：今週中に送っていただきたいんですが・・・

広田先生：今週中ですか。困ったなあ。² (堀口 1997)

(1) の場合は、広田先生がブルースの発話を繰り返しているのは単に発話の冗長性を上げるだけの全く意味のないものではなく、むしろ広田先生にとって「今

週中」は都合が良くないため、「今週中だったら、困る」という意味合いを含意し、わざと同じことばを繰り返す、ブルースの依頼を否定しようとしていると考えられる。

以上の実際の用例からわかるように、我々の日常会話では意識的にせよ無意識的にせよ相手の直前の発話を繰り返すことは普通に見られ、頻繁に出てくるものである。一方、繰り返し表現を一切使用しないままで発話すると不自然になってしまう可能性が高い。このように、繰り返し表現は会話においては欠かせない必要な表現の一つと言える。従って、実際の会話における繰り返し表現の意味機能を再検討する必要がある。そこで、本研究ではテレビドラマとアニメから実際に用いられる繰り返し表現の例文を資料とし、「繰り返し表現」とは何かという基本的な概念を再考察し、実際の会話における繰り返し表現の機能について明らかにしていく。

2. 先行研究と問題の所在

2-1. 「繰り返し表現」に関する先行研究

本研究で扱う主な「繰り返し表現」の先行研究は、田中(1997)、中田(1992)及び堀口(1997)である。田中(1997)と中田(1992)は、録音した会話文とテレビ番組を資料とし、繰り返し表現の意味機能、会話の方策や談話の展開、また発話の進行などの面を考察した。結論として、繰り返し表現の機能については主に相手の発話に対して関心があり、相手との一体感や親近感などを生み出し、感情の共有を表現するのに相手の発話を繰り返し、会話の進行を促す機能があると述べている。一方、堀口(1997)は田中(1997)と中田(1992)と異なり、繰り返し表現は聞き手の一つの役割である「あいづち」の一項目として扱っている。

2-2. 「問い返し疑問文」に関する先行研究

本研究で扱う「問い返し疑問文」の主な先行研究は、南(1985)、梅木(2011)、NOH(1995)、Wilson&Sperber(1992)である。南(1985)によれば、「問い返しの条件」は「①問題の表現の前に、相手の何らかの発話があること」と「②話し手(質問者)は、相手のそのことばをそのままか、それに近い形で繰り返すこと

によって、相手にそのことばについて確かめるものであること」という2点があると指摘している。また、「問い返しの形式」に関して「直接問い返し文」、「間接問い返し文」と「部分的問い返し文」という3種類の形式に分けられると説明している。梅木(2011)によれば、会話における「エコー型聞き返し」は従来の「聞き取れない・字義的意味がわからない表示」の他、「驚きの表示」、「不審・不満」、「面白がりの表示」、「進行促進の表示」の機能も見られると説明している。また、NOH(1995)によれば、「Echo Questions」は発話者が相手の発話が把握できないというよりむしろ、その発話に対して発話者の態度を表すことなのであると主張している。特に、発話者が相手の発話に対して「不信心」と「否定」を表すことがほとんどであると主張している。さらに、Wilson&Sperber(1992)によると、「エコー発話」とは「聞き手は話し手の発話に対してある態度を抱いているという事実を相手に知らせる」ことであると説明している。また、「エコー発話」は「アイロニー (Verbal Irony)」として用いられる場合も見られ、引用内容に対する発話の態度を伝える機能を持ち、エコーされた元の思考に対して発話者は乖離的な態度を表すものであると指摘されている。

2-3. 先行研究における問題点

前述した先行研究からわかるように、「繰り返し表現」は様々な用語で用いられ、語や文の後ろに疑問助詞「カ」あるいは疑問符「？」が付き、上昇調イントネーションで発話する場合は「問い返し疑問文」、「エコー疑問文」、「エコー型聞き返し」、「Echo Questions」と呼ばれている。しかし、以下の(2)のように上昇調イントネーションの中には様々な種類があり、上昇調イントネーションの発話は必ずしも相手に対して問いかけ性があるわけではない。つまり、純粋な「質問文」ではない。従って、どのような発話が「問い返し疑問文」に入るかの判断は非常に困難であるため、本研究では全て「繰り返し表現」と呼ぶことにする。

- (2) (羽生は澄江という女性の弁護士で、古美門は相手の弁護士である。)

澄江「先生、裁判も辞さないつもりです。お力をお貸しください。」

羽生「わかりました。」

古美門「わかりました？ 安請け合いをしてありもしない希望を待たせるのはやめたまえ。君に打てる手などない。」

(リーガル・ハイ 2 第6話)

また、繰り返された発話のみを考察すると、発話者がどのような意味で伝達しているのかを理解するのが非常に困難である。そのため、繰り返し表現を明らかにするためにはイントネーションのみならず、発話者の態度、場面、話し手と聞き手の関係性、特に前後の文脈にも注目すべきであるが、従来の研究にはこれらの要素はほとんど見られない。加えて、従来の研究からわかるように、「繰り返し表現」は会話の進行促進や関心表明、あるいは確認要求などのような「肯定的意味」と「中立的意味」で用いられることがほとんどであると言える。しかし、既に現れた発話を再現する必要が全くないにもかかわらず、発話者がわざわざその元の発話を再現するのは相手の発話に対して納得するよりむしろ問題を感じ、引っ掛かったため、そのことを受け入れ難く感じるというような「否定的意味」のほうが圧倒的に多く用いられると考えられる。

3. 研究方法

3-1. 研究目的

本研究では、発話者の観点から会話における日本語の「繰り返し表現」の機能を再考察し、「繰り返し表現」そのものの特徴について探っていく。さらに、実際の会話では「繰り返し表現」によって発話者がどのような意図を伝達するのか、また相手やある物事に対してどのような態度を表出するのかを明らかにすることを目的とする。

3-2. 本研究の「繰り返し表現」の定義と研究対象

「発話の繰り返し」すなわち「既に発話されたことを再び発話すること」は現象として実に大きな広がりを持っており、広い意味では、大部分の発話は繰り返しの所産である(中田 1992: 269)。例えば、挨拶のことばや諺、成句の類や質問に対する応答などである。また、英語で主語の人称代名詞が繰り返されるこ

と、あるいは言いよどみ（フィラー）や言い直し、「イワユル・・・」のような言いまわしなども「繰り返し表現」として扱われ、非常に広い意味を持つ（同：270）。従って、「繰り返し表現」の定義と対象範囲を指定する必要がある。

本研究では、南(1985)による「問い返しの形式」の中の「直接問い返し文」と「間接問い返し文」に従い、本研究の「繰り返し表現」を「相手の発話の直後に相手の発話形式を直接的または間接的に繰り返すこと」と定義付けておきたい。また、本研究の「繰り返し表現」の研究対象については下記のとおり対象範囲を指定する。

第一に、複数話者による会話に現れるものに限り、繰り返しのもとになった発話が同じ会話内で特定できる場合だけを対象とする。一方、広義の繰り返し表現、例えば以下の(3)の挨拶ことば、(4)の質問に対する応答及び(5)のことば遊びのようなものは全て対象外とする。

(3) A 「おはようございます。」

B 「おはようございます。」 (作例)

(4) A 「あの本もう読み始めた?」

Ba 「うん、読み始めた。」 (牧野 1980)

(5) 青巻紙赤巻紙、赤巻紙青巻紙。 (牧野 1980)

第二に、中田(1992)によれば、発話の繰り返しは(5)のような「自分の発話の繰り返し」と(3)と(4)のような「他者の発話の繰り返し」が存在すると述べられているが、両者ともに考察すると分析する際に機能が混雑してしまう可能性が高く、分析するのはより困難になると考えられる。また、会話というのは、自分の発話のみならず、相手の発話も無視できない重要な要素を持ったものである。よって、本研究では「他者の発話の繰り返し」のみを対象とし、先行発話の当事者と繰り返し表現の発話当事者との会話の流れにどのような影響を及ぼしているかという点に絞って考察を行うことにする。

第三に、相手が発する先行発話のある繰り返し表現のみを対象とする。「繰り返し表現」には以下の(6)のように発話者が看板や本に書いてあるものを見て、書いてあるものをそのまま一人で繰り返す場合もある(近藤 2001)。つまり、それは相手の発話による先行発話ではない。本研究では話し手と聞き手の間における「繰り返し表現」について注目するため、このような場合は対象外にする。

- (6) (車で「三郷」を目指して走っている時に、信号待ちで見た標識に「松伏」とあった。その時に、)

「松伏？」

(近藤 2001)

3-3. データ収集方法

会話における「繰り返し表現」では、相手の先行発話は欠かせない必須の要素である。また、「繰り返し表現」を明らかにするために、前後の文脈が非常に重要であるため、ある程度前後文脈がないと判断できなくなる可能性が高いと言える。そのため、本研究ではできるだけ様々な場面を取り扱うために、登場人物の関係や発話者の態度や表情が明示的である日本のテレビドラマとアニメ合計6本から「繰り返し表現」の例文を収集した。収集した例文の場面や発話者の態度などについて、特に前後の文脈に注目し、「繰り返し表現」がどのような機能を持っているかを考察し分類する。また、繰り返しをする発話は相手にどのような意図を伝達するのかを明らかにしていく。

4. 繰り返し表現の発話機能

テレビドラマとアニメ資料から集めたデータ(合計546例文)を考察した結果、以下の図1に示すとおり、繰り返し表現の機能は「感情の表出」であることが明らかになった。一見すると、これらは「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求/確認要求」のそれぞれの機能を表したもののように見えるが、実際の発話者の主たるねらいは、そうではなく、相手の発話に対してある種の「感情の表出」を伝達することにこそあると考えられる。つまり、純粋な「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求/確認要求」ではないと考

えられるのである。

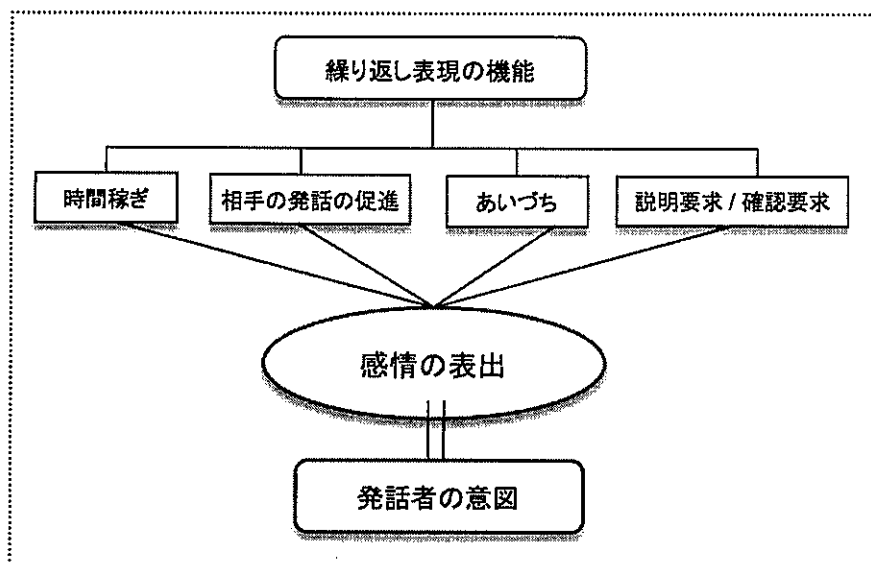


図1 繰り返し表現の機能と発話者の意図

4-1. 繰り返し表現における「感情の表出」

本研究では、繰り返し表現における「感情の表出」が、「意外感（対立）」「納得」「関心」という感情を表していることがわかった。繰り返し表現における「意外感」とは、相手が言ったことが発話者が予期していないことである、または発話者の認識や、発話者が想定していること、期待していることなど、あるいは事実と対立するため、あるいは発話者が不意打ちを受けたことによって「意外性」が生じることであるため、相手の発話の直後に繰り返すことである。つまり、発話者が「意外感」を感じると同時に「対立」という感情も生じるのである。また、繰り返し表現における「納得」とは発話者が相手の発話を繰り返し、その相手の発話に対して理解し、認めるということを表しているのであり、「あいづち」と類似した機能を持つと考えられる。繰り返し表現における「関心」とは、発話者が相手の発話に対して興味を持つ、あるいは気になるため、相手の発

話を繰り返し、相手に話を進行させるように促すことであり、「相手の発話の促進」という言語表現として現れるのである。

本研究が収集した用例の中では、発話者が「意外感」を表明するものが98.1% (540 例文) という大部分を占めており、「関心」があるという感情を表すのは総例文の1.1% (6 例文) しか見当たらなかった。また、「納得」は自然会話では出現するが、ドラマやアニメでは管見の限り見当たらない。情報の伝達という観点から考えたとき、情動的価値がないに等しいと考えられる繰り返し表現を用いる理由としては、どちらかと言えば、「納得」や「関心」よりも、「意外性」や「対立」の方が優位に立つようである。そこで、本研究では総例文の大部分を占める「意外感」のみに焦点を絞る。

4-2. 繰り返し表現における「意外感」

発話者の中に「意外感」が生じる原因は、「①相手が言っていることが前提・背景、発話者の期待または一般常識と異なる場合」と、「②会話中に突然異なる話題に転換した場合」という二通りが考えられる。また、以下の図2のように「意外感」の程度はほとんど意外感を感じない場合という「低い程度」から非常に意外感を感じる場合という「高い程度」まで分けられ、「意外感」の程度が高ければ高いほど繰り返し表現の機能は一般的な「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求/確認要求」から離れ、より「感情の表出」という機能に移行していくのである。

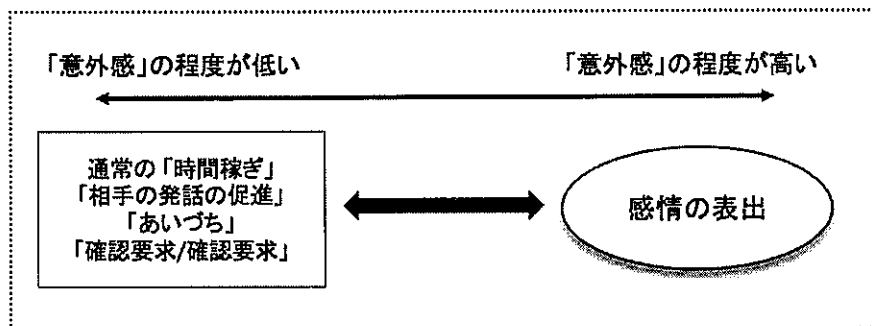


図2 繰り返し表現における感情の表出による「意外感」の程度

以下の(7)は繰り返し表現における「意外感」による「時間稼ぎ」、(8)は「相手の発話の促進」、(9)は「あいづち」、(10)は「説明要求/確認要求」を示している。

(7) (鮫島社長は研修社員である柴山と仕事について話している。)

鮫島「働いてみて何か気になる点はあるか？」

柴山「気になる点?・・・そうですね。あつ、研修で回ったどこの
ホテルにも牛乳がありませんでした。」（世界一難しい恋 第1話）

(7) では、鮫島社長は柴山という研修社員にホテルで働いてみて、何か気になる点があるかについて尋ねている。急に質問された柴山は意外感を感じ、すぐ応答することができなかったが、沈黙を避けるために、質問の主な点である「気になる点？」を繰り返し、自分に考える時間を与えながら、同時に「意外感」という感情を表出するのである。

(8) (半沢は融資について貝瀬を問い詰めているが、貝瀬は断ろうとしている。)

貝瀬「違う！私はただ・・・」

半沢「ただ？」

貝瀬「いや・・・」

半沢「ただあなたは上からの指示に従っただけ。違いますか?・・・

(貝瀬が何も返事せず、怖がっている顔をしている)

やはりそうなんですね。」

(半沢直樹 第7話)

(8) では、半沢は貝瀬がただ上司の指示に従っただけということが既にわかっているため、「ただ?」と繰り返し表現を用いたのは、貝瀬に話を続けさせよう、あるいは言い訳をさせてやろうと相手の発話を促進することを通して、貝瀬が言ったことへの反感を表したものとなっている。この場合は、半沢は貝瀬が言おうとしている言い訳に対して不満を感じ、貝瀬が素直に罪を認めることを期待しているのである。

(9) (古美門は父親との関係がよくない。)

黛「それに私思うんです。親子の問題を解決するのは法ではなく、

親と子の絆であるはずだと。」

古美門「親と子の絆ね。」

(リーガル・ハイ 1 第8話)

(9) では、黛は、古美門とその父親の関係が良くなって欲しいと望んでいる。しかし古美門は、黛の言う意見に反発して「親と子の絆ね」と皮肉っぽく繰り返している。この繰り返し表現は、あいづちでありながらも、実際は自分の考えと対立していることを示し、「そんなもので解決できるか」というような意味合いを表している。

(10) (半沢がある会社に融資をしようとするが、江島が反対している。)

江島「たかが3千万程度のちっぽけな融資じゃ焼け石に水なんだよ!」

半沢「ちっぽけ? そう考えるのは悪しき銀行の勝手な論理というもの
でしょう。」

(半沢直樹 第1話)

(10) 半沢が「ちっぽけ?」と繰り返すのは単に相手に「ちっぽけですか?」という聞き取りや真偽を確かめるというよりも、「ちっぽけではない」という主張をその繰り返し表現に込めることで、「そう考えるのは悪しき銀行の勝手な論

理というものでしょう」と非難しているのである。

以上の用例から、一見すると、発話者は「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求/確認要求」という機能で情報を伝達しているように見えるが、実際発話者は単にそれらの機能を用い、相手に情報を伝達するのではなく、むしろ相手の発話に対して「意外感」を感じたため、その感情を表出しているのである。

5. 繰り返し表現における感情の表出による発話者の態度の種類

繰り返し表現における「感情の表出」（この場合は、「意外感」）は、以下の図3のとおり、発話者にとって好ましい、あるいは感心することであるという「肯定的態度」、発話者にとって好ましくないこと、あるいは不愉快であることという「否定的態度」、肯定的でも否定的でもどちらとも言えないという「中立的態度」の3種類に分けることができる。

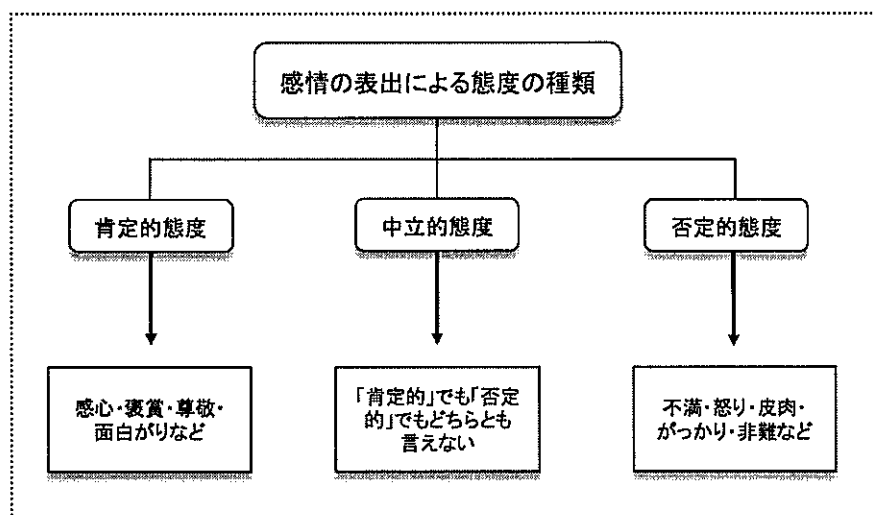


図3 繰り返し表現における感情の表出による態度の種類

5-1. 肯定的態度

繰り返し表現における感情の表出による「肯定的態度」は、相手が言ったことが発話者の想定していること、期待していること、あるいは考えていることと対立するため、「意外性」が生じることで、そのことが発話者にとって好ましいことであるため、相手の発話を繰り返し、「感心」「褒賞」「尊敬」「面白がり」「賛成」などという「肯定的態度」を表すことである。例えば、以下の例(11)のような場合である。

(11) (紀介はみんなに徳松家秘伝の最高級料理を食べさせようとしている。)

紀介「先生、お夜食などいかがですか？」

蘭丸「ハハッ。ありがたい。」

古美門「いやいや。もう私ワラビでしたらもう。」

紀介「では、徳松家秘伝の最高級料理は？」

古美門「最高級！？ぜひお願いします！」

(リーガル・ハイ2 第6話)

(11) 徳松家の食事は毎日ワラビばかりであるため、古美門はそれを嫌がっている。しかし、今回は「最高級料理」のようであり、古美門の想定と対立しているため、意外性が生じているが、古美門にとって非常に望ましいことであるため、嬉しそうに「最高級！？」と繰り返し、「ぜひお願いします！」と「最高級」に対して興味を示している気持ちを表明している。

5-2. 中立的態度

感情の表出における「中立的態度」は、相手が言ったことが発話者の想定していること、期待していること、あるいは事実と対立するため、「意外性」が生じることである。しかし、そのことが発話者にとって肯定的なことでも否定的なことでもなく、単に発話者自身が相手の発話に対して意外感を感じることを表明しているのである。

(12) (ひろしが会社の人にお土産を選んでいる。)

美冴「もうなんだっていいじゃないそんなもん。」

ひろし「なんだっていい？お前は給湯室の恐ろしさを知らないな。」

美冴「給湯室？あーそうね。確かに OL 時代、つまんないお土産買って
きた上司を裏でいろいろ文句言ってたわね。」

ひろし「だったら俺のプレッシャーわかるだろう？」

(クレヨンしんちゃん)

(12) では、ひろしが突然「給湯室」に話題を転換したせいで、美冴は意外に感じてしまい、「給湯室」ということばは美冴にとって予期されていなかったことであるため、対立が生じていると言える。そのため、ひろしのことばを繰り返しているが、単にひろしからの説明を求めているのではなく、自分が意外感を感じることも表明している。しかし、この場合は美冴がひろしのことばを繰り返したのは単に「なぜ急に「給湯室」と言っているのか」のような意味合いであり、単に意外であると相手に伝達するだけであるため、肯定的でも否定的でもなく、「中立的態度」を表しているのである。

以上のように、感情の表出における「肯定的態度」と「中立的態度」の例が見られた。しかし、実際の会話では発話者が「肯定的態度」を表明する際は、わざわざ「繰り返し表現」を用いず、「やった！」、あるいは感動詞類などのように繰り返し表現以外の表現を用いることが多く見られる。それに対して、わざわざ相手のことばを繰り返すのは単に繰り返すのみではなく、発話者にとってそのことには問題があり、受け入れがたい、あるいは受け入れたくなく感じられるため、相手の発話の問題を感じる部分を繰り返し、それに対して「否定的態度」を表明する意味があると考えられる。本研究の調査では、管見の限り、繰り返し表現における感情の表出による「肯定的態度」の例文は総 540 例中³ 25 例（約 5%）のみしか見られなかった。「中立的態度」の例文は、213 例（約 39.44%）見られ、例文のほとんどは突然の話題転換というような場合である。それ以外の 308 例（約 57.03%）は全て「否定的態度」であり、総例文の過半数以上を占めており、非常に多く用いられていることが明らかになった。

5-3. 否定的態度

繰り返し表現における感情の表出による「否定的態度」は、相手の発話が発話者の認識や想定していること、あるいは期待していることと対立するため、「意外性」が生じていることである。しかし、「否定的態度」の場合は相手の発話は発話者にとって好ましくないことであるため、相手のことばや句などを繰り返し、「不満」「怒り」「嫌悪感」「がっかり」「皮肉」「軽視」「非難」「不信」「不同意」「反論」などという「否定的態度」を表すのである。

(13) 堀「ジムで会う時は社長どんな感じなんですか？」

柴山「うーん・・・割とおちゃめなところもあるかなあ。」

堀「おちゃめ！？あの社長が！？えー想像できない。」

(世界一難しい恋 第3話)

(13) では、社長はいつでも厳しい人ということを社員たちが知っているにもかかわらず、柴山は社長が「おちゃめ」なところがあると言っている。そのため、堀にとって意外であると思っており、柴山の発話は堀の考えと対立している。その結果、堀は驚き、「おちゃめ！？」という柴山のことばを繰り返し、「あの社長がおちゃめなところがあるなんて想像できない」、と柴山が言ったことに對して不信を表しながら、否定している。

(14) (泰山と綾は夫婦で、泰山が綾に貸した1億円の返還を求めている。)

泰山「綾・・・1億円返してくれ。」

綾「もう使っちゃった。」

泰山「使っちゃった？ 使っちゃったってお前・・・

(綾を殴ろうとしている) い・・・1億だぞ！？1億だぞ！？

どういふことだ？それ。

(民王 第8話)

(14) では、泰山は綾に1億円を返してほしいと思っているが、綾はそのお金をもう使ってしまったと言っている。泰山はそれほど多額のお金を綾が短期間で

使ってしまうことは予想しておらず、泰山の想定と対立している。そのため、泰山は「使っちゃった？」と繰り返し、大変怒りながら、「1億円だぞ？そんな多額のお金を短期間で全部使うわけないだろう？」という意味合いを含みつつ綾を非難している。

(15) (羽根は湯浅社長の代わりにホテルの営業者になろうと発言している。)

半沢「しかし、湯浅社長はあなたにはないものを持っています。」

羽根「何かしら？」

半沢「誠実さです。ホテルという接客業をする上でそれは何よりも大切なものだと思います。」

羽根「(笑う) 誠実さ？そんなものでこのホテルが100年もやってこれたと思ってるの？」

(半沢直樹 第9話)

(15) では、半沢は湯浅社長は羽根専務と異なり、「誠実さ」を持っていると言っている。しかし、羽根は「誠実さ」で伊勢島ホテルが今まで営業し続けられたわけではないと考えているため、半沢の発話と自分の考えとの間に対立が生じたと感じた。そのため、羽根は半沢が言っていることに対して嘲笑し、「よくそんなことが言えるね」という皮肉を込めつつ、「誠実さ？」と繰り返しながら、半沢の発話に対して受け入れたくない気持ちを表明している。そして、「そんなものでこのホテルが100年もやってこれたと思ってるの？」と「誠実さ」に対して反論している。

6. おわりに

繰り返し表現の機能は、一見すると、「時間稼ぎ」「相手の発話の促進」「あいづち」「説明要求/確認要求」という4種類の機能を表す表現を用いて表されているように見えるが、実際はそれぞれの持つ機能を持ちつつも、相手の発話に対するある種の「感情表出」を行っているのである。また、繰り返し表現における「意外感」という感情は、発話者が繰り返し表現を用いるのには、相手の発話に対して問題を感じたり（「意外性」）、自分の認識と異なるものである（「対立」）

が生じていることを相手に示すものであることが明らかになった。加えて、繰り返し表現における「感情の表出」は、「肯定的態度」、「中立的態度」および「否定的態度」という発話者の態度の種類によって分けられる。しかし、実際の会話では発話者がわざわざ相手のことばを繰り返すのは単に繰り返すのみではなく、発話者にとってそのことが問題であり、受け入れ難く感じるため、相手の発話の問題とを感じる部分を繰り返し、それに対して「否定的態度」を表明する意味があると考えられる。従って、「否定的態度」は繰り返し表現の主な特徴の一つであると言えよう。

本研究は繰り返し表現の基本的な概念を掴みやすくするために、テレビドラマとアニメの設定されたものを中心に例文を収集し、繰り返し表現の機能を考察した。しかし、ドラマや映画というフィクションの会話の場合と自然会話の場合とはどのような相違点があるかという点についてまだ大きな疑問点が残っており、今後の検討の余地を残している。

注

- 1 「繰り返し表現」は、「問い返し疑問文」、「反復表現」、「エコー発話」、「エコー疑問文」、「エコー型聞き返し」、「Echo Questions」という用語を用いる研究もある。
- 2 以降、「~~~~~」の線は、発話者が繰り返した相手の先行発話を指す。「_____」の線と太字は、発話者が相手の発話、つまり「~~~~~」というところを繰り返した箇所を指す。加えて、繰り返した発話は直接繰り返しあるいは間接繰り返しである。また、「.....」の線は、発話者が繰り返した発話に主な関係性がある要素を指す。
- 3 「意外感」という感情のみの総例文であり、「開心」という感情の6例を取り除いた数字である。

参考文献

- 梅木俊輔 (2011) 「エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係」『日本語 / 日本語教育研究』[2], ココ出版 pp.119-136
- 近藤研至 (2001) 「「意外である」ということと「問い返し疑問文」について」『言語と文

- 化』14号, 文教大学言語文化研究所 pp.16-27
- 田中妙子 (1997) 「会話におけるくりかえし」ーテレビ番組を資料としてー『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9号 pp.47-67
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告 104 研究報告集 13』pp.267-302
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法 ー日・英語比較対照ー』大修館書店
- 南不二男 (1985) 「質問文の構造」『朝倉日本語新講座 4 文法と意味 II』朝倉書店
- D. スペルベル, D. ウィルソン (2000) 『関連性理論 ー伝達と認知ー』研究社出版
- NOH, Eun-Ju. (1995) "A Pragmatic Approach to Echo Questions", *UCL Working Papers in Linguistics* 7, pp.107-140

用例出典 (テレビドラマ)

- 日本テレビ『世界一難しい恋』2016年4月～6月放送
- テレビ朝日『民王』2015年7月～9月放送
- TBS テレビ『ダメな私に恋をしてください』2016年1月～3月放送
- TBS テレビ『花より男子2 (リターンズ)』2007年1月～3月放送
- TBS テレビ『半沢直樹』2013年7月～9月放送
- フジテレビ『リーガル・ハイ 第1期』2012年4月～6月放送
- フジテレビ『リーガル・ハイ 第2期』2013年10月～12月放送
- テレビ朝日『クレヨンしんちゃん』1992年4月～現在放送

カンジャマーボンクン サティダー (大阪大学大学院言語文化研究科
日本語・日本文化専攻博士後期課程)

Repetition and the Speaker's Attitudes in Japanese Conversation: Focusing on the Speaker's Negative Attitudes due to Unexpectedness

KANJAMAPORNKUL Sathida

This paper aims to analyze the function of “Repetition” in Japanese conversation, and in addition, clarify the types of attitudes that the speaker expresses towards the partner’s utterance by using “Repetition” in an actual conversation. As a result of data gathering from Japanese television drama and anime materials, it is revealed that the function of “Repetition” is “Emotional Expression”. Seemingly, “Repetition” is mostly expressed in terms of 4 kinds of functions: “Time-gaining”, “Motivation of the partner’s utterance”, “Back-channel (Aizuchi)” and “Explanation/Confirmation Request”, but in fact the speaker does not have any of these intentions, or if the speaker do have these intentions some sorts of “emotions” are also mingled with these intentions and be transmitted at the same time. In this paper, “Emotional Expression” in “Repetition” is described as an “unexpectedness” which occurs when there is something unexpected and the speaker felt a sense of surprise towards the partner’s utterance.

Moreover, “Emotional Expression” in “Repetition” can be divided into 3 types of attitudes : “positive attitude”, “neutral attitude” and “negative attitude”. However, in an actual conversation, when the speaker immediately repeated the partner’s utterance or using “Repetition” instead of other expressions is because he/she feels that there are some problems with the partner’s utterance which makes the speaker unwilling to accept that particular utterance. Hence, the speaker expresses his/her “negative attitude” towards that utterance by immediately repeating the partner’s utterance. Additionally, according to the data, it is clear that “negative attitude” is overwhelmingly prominent and it can be concluded that one of the features of “Repetition” are expressing “negative attitude” towards the partner’s utterance.